ナバルタビ織研修２期目も支援します。

３月下旬、ナバルタビ織研修担当のスヌーリアから、織と刺繍の技能を持つマンディさんが亡くなられたという悲しい知らせがありました。やはりご高齢で、昨年病気療養中だったグサベンさんは、元気になられて織を再開されました。グサベンさんには、その織りに魅かれた方から薬代のご寄付をいただいていました。早く健康を回復されて、またよい織りを見せて下さいという願いが通じたようです。

ビラーン民族の伝統織や刺繍の技能は、２、３名の高齢熟練者と、少数の中堅織手に支えられているのが実情です。ティナラク織と原材料・工程は同じでも、柄の印象から、ナバルタビ織は帯に向いていると、２年前に帯地として人気が出ました。

ビラーンの伝統文化継承が課題の現地では、この日本の市場も視野に入れた織手育成研修が企画され、要請を受けて２年前に支援を開始しました。３月に中途参加者を含む３名が研修を終え、うち、ジェニリンさん一人が、一人前の織手と認定されました。

研修施設も兼ねる「織りの家」があるアムグオでは、原材料をまかなうため、繊維を採るアバカと、染料の材料キナルムとロコの木を植え、その樹間で、研修生の食材となる野菜栽培を予定しています。

この織手育成研修のための継続支援の申請が届きました。同時に、昨年１年間のナバルタビ織売上げ報告も入手しました。地元（男性用民族衣装の上着用）約４万円、私たち HANDS が２万円弱でした。

市場規模はまだまだ小さいけれど、レイクセブの COWHED に対する 10 年余りの研修やスタッフ給与等の支援の事例から、ナバルタ織プロジェクト(NTP)についても、少なくとも、あと１期２年間の支援で、何らかの成果が期待できるのではと、研修事業費を今年の予算案に含むことにしました。

なお、NTP は、ナバルタビ織だけでなく、伝統衣装に欠かせない他の織物生産も手掛けています。

昨年度の支援事業に含めたブルームと呼ぶ高機（写真）を購入して、アムグオにあるビラーン民族学校の女子用のマロン（スカート）と男子用のウトブ（スカーフ）を織り、約４万円の売り上げ収入がありました。

はじめまして

五十嵐敦子

数年前までは、研究室で化学実験をしたりデータ整理をしたりの毎日で、NPO活動はもちろんボランティアとも全く縁のない生活をしていました。

そんな中、趣味の舞台鑑賞から舞台の照明に興味を持ち、区役所主催の音響と照明の講座に参加し、 講座終了後有志と公会堂で音響と照明のボランティアを始めました。

この活動がきっかけとなり、区役所で市民活動に関する仕事をするようになり、国際交流の団体を通して、山崎さんとHANDSの活動を知りました。

家が近いこともあり、何かお役に立てればと思っておりましたがその時は実現には至りませんでした。 2 年後、仕事を辞め、地域でWE21ジャパンの活動に参加し始めたところ、支援先の報告会で山崎さんと再会。これは運命かな ・・・ と今回事務局のお手伝いをさせていただくこととなりました。

パソコンに少しは自信があったのですが、始めて目にする会計ソフトに目を白黒！

HANDSの活動内容の多いこと、会員数の多いことに茫然！

また、会員の皆様からの寄付を始め、使用済み切手の収集や、寄付品をリサイクルショップで売るなどボランティアの方々の地道な活動が支援につながっていることを知り、責任の重さをひしひしと感じています。

藤川さんにいろいろと教えていただき、少しでもお役に立てるようになれればと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。

Ｐ１でもお知らせのように、6 月からの会員増加に対応し、会員・市民と現地をしっかりつなぐ事務局運営のために、71 号でご紹介の藤川さんに続いて、3 月から、五十嵐さんにもパソコン業務を中心にお手伝いいただくことになりました。写真は 4 月例会で 73 号発送準備作業参加の五十嵐さん（左端・区民活動支援センターで）